
殺し屋は人を殺さない

真中成実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺し屋は人を殺さない

【Nコード】

N1680BA

【作者名】

真中成実

【あらすじ】

海外留学中に失踪した”イサオ”は元殺し屋として”おれ”の前に現れた。

再会を喜ぶ暇もなく、いきなり銃を突きつけられた”おれ”は渋々”イサオ”との共同生活を始める。

”イサオ”の表の顔はデイトレーダー。裏の顔は、マヌケでクズな殺し屋どものしりぬぐいをする、プロフェッショナルのためのプロフェッショナルだ。

うなれ！愛銃アラスカン！汚い悪党どもと、不条理な世の中をぶっ潰せ！

人を殺さない殺し屋による異色ハードボイルド譚。

第一章 殺し屋入門（前書き）

この小説はフィクションです。

この作品は殺人を肯定するものではありません。むしろ作者は否定的な立場にいます。殺人を行えば当然刑法に触れます。あくまでエンターテインメントとしてお楽しみください。

15歳未満の方の閲覧はご遠慮願います。

第一章は前フリになりますので、能書きをたれるな！という方は次章からお読みください。

第一章 殺し屋入門

殺し屋はハイリスク、ローリターンな職業である。

まず殺し屋が対象となる相手を殺すことによって、依頼主に金銭的な利益がもたらされる場合を考えてみよう。ブラジルで実際にあった事例だ。

ある会社の社長が病死し、すべての財産が息子に相続された。それに不満を抱いた社長の弟が、殺し屋に社長の息子の殺害を依頼した。

その翌朝、太陽が昇る少し前、サンパウロの裏路地に真っ赤な血だまりができた。

三日後、社長の弟は殺し屋に報酬を渡す。報酬は相続した遺産の約十分の一、現地でビルが三つ建つような額だ。

それからひと月して、社長の弟は死体となって発見された。

発見された場所が、弟の住んでいるマンションの真下だったことから、この事件は、見せかけの平和を享受する庶民の間では、単なる転落死として片づけられている。

しかしながら、裏の世界では、殺し屋が弟を殺したのだという意見で一致していた。そして彼らは口々にこう言った。「当然さ。あまりにも報酬が少なすぎる」

読者諸兄は、この殺し屋があまりにも欲張りすぎていると思うか

もしれない。本当にそうだろうか？よく考えてみてほしい。これから彼は警察に追われ、捕まればよくて監獄行き、最悪なら電気椅子だ。それに比べて社長の弟は金を払っただけ、直接手を下したわけではないから、警察に捕まる可能性は低い。この先ずっと安心して暮らしていける。

このように原則的に殺し屋と依頼主との間はイーブンな関係ではない。依頼人の方が立場上強いのだ。殺し屋は依頼主に搾取され、残った絞りかすだけが自分のものになる。だからこそ、殺し屋は毅然とした態度を崩すべきではない。ときには腐った依頼主を見せしめにする必要がある。

殺しの依頼が怨恨によるものだったとしても、そう大差はない。殺しを職業にするのはうまみが少ないのだ。確かに依頼主は標的となる相手を殺すことによって、殺し屋にそれ相応の報酬を与えるだろう。それこそ身を削ってでも。それでも危険度を考えれば、他の職業で地道に金を稼いだ方が絶対によいのである。

こちらにも例を挙げよう。今度は日本の例だ。皆川ヒ素殺しと聞けば、ご記憶の方もあるかもしれない。大まかなあらましはこうである。

あるゼネコンの社長がインサイダー取引によって莫大な利益を得た。

ところが当時の経理を担当していた人物が、不透明な株の譲渡が行われた形跡を発見した。自社株がわずか一日で、ある人物を經由し、大量に売りさばかれていたのである。時価にして数億。個人が一日で動かす金としては大きすぎた。

彼は警察に密告した。その三週間後、ゼネコンの事務所前には警官の足跡が大量につけられた。子豚のように丸々太った社長はあつというまに留置所送りになった。

復讐に燃えた社長は人を使って密告者を殺すことを考えた。

現在のインターネットの闇は驚くほど深い。あるキーワードをちよんちよんと打つだけで、トップに裏の仕事の募集が現れるのだ。ドラッグ、窃盗、売春、恐喝、そして殺し。魑魅魍魎うずまく裏の世界は、以前なら小市民の目に触れることはなかった。丸暴や外国人マフィアの専売特許だったのだ。限られた人しか入れない、会員制のバーのようなものだった。それが今ではフリーターであろうが主婦であろうが、宅配ピザを注文するように気軽に足を踏み入れることができる。依頼主として、そして実行犯として。

社長はネット上で密告者を殺す暗殺者を探した。

たった二時間。驚くほどすぐに見つかった。“キール”。安易な名前だ。彼らは密告者をどのようにに殺すか、そして報酬などの契約内容を、ネット上で入念に打ち合わせた。

社長に呼び寄せられた密告者は、“キール”がコーヒーの中に入れたヒ素で、瞬く間に昇天した。豆腐を握りつぶすよりも簡単に事は済んだ。

とはいえ、人を殺すという重大事がそう易々とうまくいくわけがない。殺した時と同じくらい簡単に、依頼主である社長と実行犯である“キール”は逮捕された。ネット上でのやり取りからアシがついたのだ。彼らはあるとか隠語スラングを使わずに、“殺す”や“ヒ素”といったようなストレートな表現でやり取りをしていた。バカな

話だ。今はネット上で何を書いても筒抜けだということを知っている。ない。

むろんこんな間抜けな殺し屋ばかりではない。綿密に計画を立てて、まるで芸術のような殺しを行うやつもいる。ただ、どうせ金のために殺すのならば、依頼を受けてから殺しを行い、スズメの涙ほどの報酬を得るよりも、適当な人間に保険金をかけて殺した方が、はるかに効率が良く、安全なのだ。

本物のプロは小市民の目には触れない。本物はたいてい国家や行政、巨大組織に雇われた準公務員的存在である。カスみたいな仕事に食らいついてくるのは、アマチュアか、プロの中でも本物になれなくて、チンケな仕事を不器用に遂行し、はした金を受け取るハイエナどもなのだ。そんなやつらに仕事を依頼する人間の気がしれない。

ここまでえらそうに殺し屋について語ってきたが、おれは殺し屋ではないし、いままでに殺し屋であった時期もない。もちろん殺しを依頼したこともない。すべてイサオの受け売りである。一応断っておくが、イサオという名前はあいつの本名ではない。仮名である。といってもあいつに配慮しているわけでは全くない。人を脅迫して、他人の棲家をぶんどるやつのことなんか、誰が気にするもんか。あいつの名を明かさないのはおれの身に危険が及ぶのを避けるためだ。あいつに関することを公にするのは大きな危険が伴う。

それでもおれがこんなものを書いているのは胸くそが悪いからだ。一日中おれの部屋でパソコンをいじくってるニート野郎のくせに、おれの何十倍もの金を持ってる。嫉妬？その通りさ。何が悪い？

今あいつはおれの目の前にある薄いクリーム色のドアの向こうに

いる。どうせまたユーロの動きでも見てるんだろう。悔しいことにあいつは腕利きのデイトレーダーでもあるんだ。一日に百万ぐらい楽々稼ぐ。マジでむかつくやつだ。

だが怒りとともに恐怖もある。こんなものを書いているところを、あいつに見つかったら、やつの愛銃アラスカンが火を噴くだろうから。確かにおれの家の壁は、隣のチャラ男が夜な夜な女を連れ込んでヤッてる声ははっきり聞こえるくらい薄い。でも、あいつなら減イレンサー音装置さえつければ、誰にも気づかれずに、おれが悲鳴をあげる間もなく殺すことが可能だろう。考えただけで身震いがする。でも書かないとあいつへの怒りは収まりそうもない。ジレンマだ。

まあ、いい。とりあえず書く。その結果死んだって知るもんか。

第二章 天使が悪魔（前書き）

推理タグではないような気もしますが、適当なものがなかったので
：

第二章 天使が悪魔

小さいころのイサオは天使だった。

華奢で、手足が長く、日本人離れした北欧系の顔立ちをしていた。特筆すべきは目だった。小学校の頃のあいつの目は、秋晴れの日の朝のような澄み切った目をしていて、おれはそんなあいつの目が、そして何よりもあいつ自身が好きだった。

おれは当時六年生で、あいつは一年生だった。おれが一年生の教室に遊びに行くと、いの一飞到飛び出してきて、「遊ぼう」というまなざしをおれに送ってきた。イサオとおれは絵を描いたり、鬼ごっこをしたりして遊んだ。体力的には遥かにおれの方が上だったはずだが、どうしてもあいつには勝てなかった。いつもあいつはおれが追ってくるコースを予測し、裏をかいて振り切った。鮮やかな手並みだった。そして、おれから逃げ切ったのを確信すると満足げな笑みを浮かべるのだった。

一年後、おれは中学にあがり、イサオと離れ離れになった。

中二の時、学校祭がありイサオも遊びに来ていた。「おれのこと覚えてる？」と尋ねると満面の笑顔で頷いた。中学の時にイサオに会ったのはその時だけだった。

俺が高校にあがると、まったくイサオに会う機会は無くなった。

大学に通うようになったころには、イサオとの思い出も、イサオという人間そのものもすっかり忘れてしまっていた。

ところがおれが大学四年の夏、イサオが行方不明になった。

イサオがアメリカに短期留学しているときに事件に巻き込まれたのだ。高校生が異国で襲われる、このセンセーショナルな事件は、ネタに飢えていたマスコミの格好の餌食となった。イサオの家族は毎日のように取材を受け、テレビの全国放送でも取りあげられた。泣いているイサオの母親の顔が何度もテレビ画面に映し出された。

おれが噂やニュースで聞いた話を総合すると、こういうことになる。

イサオは事件の当日、友達と海に遊びに行っていた。浜辺で水をかけあったり、沖まで泳いだり、女の子をナンパしたりしているうちに夕方になった。一緒に来ていた二人の友達トイレに行く、と言ってイサオを一人残し、連れだってトイレに行った。そして友達がイサオのもとに戻ってみると、あいつの影も形もなくなっていたのだ。遺留品は財布一つだけ。中身は全部抜き取られていた。目撃証言は、イサオが三人の男にからまれていたという地元住民の証言のみ。事件現場の砂浜には小型ボートが発見した跡が残されていたが、戻ってきた跡はなかった。警察はその他にも手がかりはないか、付近をくまなく捜査したが、結局有力な情報は見つからなかった。

あまりにも謎が多いこの事件は、世間の（主におせっかいな週刊誌の）興味をかきたてた。金目的の犯行であるとか、海に沈められたのだとか、事件現場がゲイカップルの出会いの場となっていたことから、レイプされて連れ去られたのだとか、いろいろな憶測を生んだ。

捜査は二年半にも及んだが、結局迷宮入りとなった。捜査本部の看板も下ろされた。

それでもイサオの母親はあきらめることができず、現地まで足を運び、イサオの友達や付近の人々に話を聞いたり、事件現場に実際に足を運んだりして、どうにかイサオの足跡をたどろうとしたが、すべて徒労に終わった。

アメリカから戻った母親は悲嘆にくれた。昼夜問わず泣き続けた。友達や近所の人々との交流が少なくなった。そして一か月もすると家から一步も出なくなり、家族とも挨拶を交わす程度になっていった。

母親はカウンセラーに相談したり、精神科医に薬を処方してもらったりしていたが、目立った改善は見られなかった。

そこで家族は母親にイサオについて区切りをつけさせようとした。イサオの葬儀を行ったのである。

おれもちょうど会社から長期休暇をもらい、実家に帰省している最中だったので、その葬儀に参列したが、実に奇妙な葬式だった。

葬式に来た人々はお悔やみをいうのをためらい、微妙な面持ちで仏前に座っていた。講和を行う坊さんも、必死で適当な言葉を探していたが、結局見つからず、グダグダなままで話が終わった。おれもこれで涙もろいところがあるのだが、ほんの一滴の涙も流れなかった。母親は大声をあげて泣いていた。死体が入っていない棺桶の上で、イサオの遺影だけが笑っていた。

葬儀の途中、イサオのばあさんと話をする機会があった。

「イサオくん、残念ですね。でも、ぼくは生きていると信じていま

す」

生きている、という言葉は、イサオの生存をあきらめた家族には禁句だったかもしれない。でもおれは正直な自分の気持ちをいった。

「どっちでもよかあ」

おれは耳を疑った。

「姉ちゃんたちが上に二人おるけんな。イサオがおらんでん全然寂しゅうない。生きとるもんだだけで、どうにかやりたい」

葬式をやるうと言いだしたのはこいつだな、と思った。どっちでもいいと言ったのは、おれに心配させまいという配慮かもしれない。年齢を経て得た達観があるのかもしれない。でも、イサオの母親の気持ちを考えたら、そんなこと言えないはずだ。お腹を痛めて生んだ子をそうやすやすと諦められないことくらい、同じ女なら分かるだろう。

おれはばあさんに丁重におじぎすると葬儀場を後にした。おれの右拳が震えていた。

それから、さらに三年がたった。

おれは仕事帰りに酒でもひっかけて帰ろうと、新宿駅のあたりで飲み屋を探していた。

雑踏の中を歩いていくと、大きく手を振る人影が見えた。外国人かなと思った。風俗の客引きか何かか？ どんどん近づいてくる。長い手足、澄み切った目。

「まさか、イサオか？」

その言葉を聞くやいなやあいつはおれに抱きついてきた。おれは男同士が抱き合うのもなと思ったが、あいつがアメリカに留学していたのを思い出し、なるほどアメリカナイズされて帰ってきたんだな、と心の中でほくそ笑みながら、受け入れる態勢を作った。あいつの左腕がおれの腰に回った。

「お前、生きていたのか？」

おれはそう尋ねた。

腹に固く冷たいものが触った。

「動くな、撃つぞ」

あいつはおれの耳元で静かに囁いた。

横断歩道の信号は変わり、人々は動き始めた。夜の街を彩るネオンは点滅を繰り返す。聞こえてくる、OLの笑い声。おれの時間だけが止まっていた。

第三章 非日常のある風景（前書き）

どうしてもエロネタが入ってくるなあ。いや、これは必要な描写なのだ。

うん、多分そうだ。

第三章 非日常のある風景

おれとイサオは道の往来おうらいで抱き合ったまま、氷の彫刻ちようこくのように固まっていた。

「助けてくれ」と叫ぼうと思った。でも、唇が震えるだけでまったく言葉にならなかった。腹に突きつけられている冷たい物体が、人魚姫の毒薬みたいにおれの声を根こそぎ奪っていたからだ。

救助を求めるべき人は周りに腐るほどいた。男、女、背が高いやつ、低いやつ。不細工なやつ、とびっきりの美人。おれたちを避けるように人の群れが通り過ぎてゆく。しかし声は出せない。出したらその瞬間、“ズドン”だ。

やむなくおれは、目線でSOSのサインを送ることにした。眼球を右へ、左へめまぐるしく動かす。おい、気づいてくれ……。髪の毛の長い女と目が合う。よし、いいぞ。警察を呼ぶんだ。この狂ったガキをパトカーの中にブチ込んでくれ。おれの必死の願いも空しく、女は汚いものでも見たかのように目をそむける。

くそ、何が悪かった？ そうだ、表情だ。おれはキョドってるんだ。恐怖で不審者みたいな顔になっているんだ。そんなやつを助けようとはおれでも思わないだろう。おれはできるだけ普通の表情になるように、顔の筋肉を動かそうとした。動かない。ピクリともしない。おれの顔は蟬せみで塗り固められているかのように形を変えなかった。息だけがだんだんと荒くなり、イサオの、女のように長い髪をそよがせた。

「腹が減った。メシが食いたい」

空から声が降ってきた。その時は本当にそう思った。

「聞いている？メシが食いたい」

おれは耳を疑った。そんなことがあるはずがない。でも可能性は一つしかなかった。この、おれに銃をつきつけている、昔なじみの凶悪犯がそういったのだった。答えは、もちろん一つしかなかった。

「ああ、いいとも」

腹の感触がなくなり、腰に巻かれていた腕がほどかれた。肩の力がどっと抜けた。

安心しきったおれの正面には、二十歳を過ぎているとは到底思えない子どものような笑顔があった。

おれは甘い。そう思った。ムチとアメじゃないか。ほら、むかし部活の先輩が言ってた、女を確実にオトす方法だ。墓地でもいい、お化け屋敷でもいい、身も凍るような高地でもいい。とりあえず恐怖をあたえる場所に連れて行く。そのあとやさしい声をかける。そうすれば、女なんてマタタビをたかれた猫みたいに、一発でコロリさ。

知識としては知っていたんだ。知っていたにも関わらずそれを逆用された。しかも男に。

放心状態のおれに追い討ちをかけるような声が飛んだ。

「早くいこうよ。おれ、カツ丼がいいな。せっかく日本に久しぶりに帰ってきたんだから」

殺される、という恐怖は一応無くなった。でも横を歩いているこの男が、次の瞬間何をするかは分からない。

そんな空気が伝わったのだろう。

「やだなあ。殺したりなんかしないよ。さっきのはあくまでジェスチャーさ」

おれはほっとした。イサオはくすくす笑うと、

「本当に分かりやすいね。昔と全然変わっていない。ただ、声をあげようなんて考えない方がいいよ。このポケットに入っているこれは、やりようによってはクマですら一発で殺せるからね」

緊張がまた戻ってきた。おれは相手の腰のあたりのふくらみを注視した。

大きな笑い声が起こった。おれは、目の前で死にそうになるほど笑っている、この男の頭を殴りたかった。でも、止めた。反撃が怖かったからだ。そして、その反撃はすなわち死を意味するからだ。

結局、近くのスーパーで弁当を買い、おれの家で食べることにした。あとから考えればこれは失策だった。自分を殺そうとしているかもしれない相手に、自分の住所を教えるなんて。実際にはイサオはおれを殺そうとしていたわけではなかった。でも、この安易な決断が、後々面倒な事態を招くことになったのだ。

おれのねぐらであるボロアパートに着くと、おれはのり弁を、イサオはリクエスト通りカツ丼をそれぞれ食べた。二人とも一言も話

さなかった。

弁当の空容器が二つできた。

「さあ、そろそろ話してもらおうか？」

イサオは何のこと？と、とぼけたフリをしていたが、

「その前に…」

と言って自分の荷物から何かを取り出した。おれは反射的に身構えた。

「危ないものじゃないよ」

といってその機械を持ちながら部屋の中を歩き回り始めた。機械がうなるような音を立てる。

「ああ、ここだ」イサオは立ち止まると、「ドライバーある？ プラスのやつ」

と言いながらコンセントのカバーを外した。

「これでいいか？」

おれがドライバーを渡すと、あいつは何やらごそごそやっていたが、

「あった。盗聴器」

と手に持った物体を、虫を捕まえた少年のように高々と持ち上げた。

おれは咄然^{あぜん}としながらそれを見ていた。

「ほら、ここにも。ここにも」

ブザー音が鳴り、次々と盗聴器が見つかる。そのたびにあいつの目が輝く。

急にあいつが立ち止まった。タンスのほうをじっと見ている。

「ねえ、あれって設置式のやつ？この部屋借りたときからずっとあるの？」

「ああ、そうだが？」

おれは困惑しながら答える。あいつがにやりとした。

「今度は機械^{これ}使わないで、見つけてあげようか？」

あいつはそう言うと、おれの返事を待つまでもなく、床に這いつくばり、タンスの下をまさぐった。

「ほらね。やっぱりあった」

あいつは得意げに盗聴器を掲げた。

「ただの変態の仕業か、ヤクザ関係の仕事かそれは分からないけど、いっぱい見つかったね。まさかとは思ったけど、一応調べておいて

よかった。感謝してよ？おれのおかげで、盗み聞きされてる生活から解放されたんだから。今まで、あんなことやこんなことずっと聞かれてたなんて知らなかったでしょ？いやいや、無知って怖いなあ」

おれは冷や汗が出た。おれの部屋に盗聴器が隠されてたことじゃない。こんな非日常的なことを、まるで歯を磨いたり、顔を洗ったりするのと同じように簡単にやってのけてしまう、目の前の男に対してだ。

右隣りの部屋から、女の甲高い声と男の荒い息づかいが聞こえる。左隣の部屋からは、エレキギターの音が大音量で流れてくる。おれが大声で叫んだところで誰も気づかないだろう。そう思うと、おれは際限のない不安に襲われた。まるで水の中にたった一人で閉じ込められたようだった。

第四章 真相と真実（前書き）

ちよいとばかり長くなりました。

途中同性愛に関する記述が出てきます。

作者は異性愛者ですが、同性愛に対して肯定的な立場のつもりです。しかしながら知り合いのゲイの方に、聞いたお話を参考にしているため、

事実と異なる点があるかもしれません。

不快に思われたり、事実と異なる点がございましたらコメントいただけるとうれしいです。

第四章 真相と真実

「ごめん。人の部屋勝手にいじくっちゃって…。聞きたいのはおれのことだろ？話すのは全然いいんだけど、誰かに聞かれるとちょっとまずくてさ」

いきなり下手に出られるとちょっと困惑する。

「いや、それは別にかまわないが…」

イサオが頷く。

「じゃあ、何から話そうか？」

「おれは頭が悪いから、順番通りの方がいいな。お前がいなくなった時のことから話してもらえるとありがたい」

「分かった。おそらく大体のことは知っているんだろうから、ある程度はしよるとして…。連れて行かれた二か月前から話し始めるのが一番いいかな。日本は平和ボケしてる国だから、全く気にも留めていないんだろうけど、この世の中には各国のエージェント、一般的にいうところのスパイがたくさんいる」

「まあ、よく言われていることだな。日本なんてスパイ天国なんだろう？」

イサオはおれに同意するように頷く。

「国家戦略なんて基本的には情報戦だ。孫子の“戦わずして勝つ”^{スツ}っていうのも、誤解されがちだけど、“戦わないで勝つ”っていう

意味じゃなくて、“戦う前に勝っている”。つまり、本当は戦う前に相手や自分の情報をよく吟味した結果、勝算は十分であるってことを意味している。だから“戦わずして勝つ”なんだ。

と、いうわけで優秀なエージェントの存在はすごく重要になる。各国は小さいころから英才教育えいようきょういくを行ったり、他国からリクルートしてきて、エージェントを養成ようせいしたり、雇ったりするんだ。でも、もっとも希少価値きしょうかちの高いのが二十歳以下の子どもなんだよ。二十半ばから老年までのエージェントは自国で育成することができ。そこそこの知能指数ちのうしすうのやつらなら、束になるくらいいるからだ。でも、子どもがエージェントとして機能するためには天才ジニアスでなければならぬ。百メートルを十秒以下で走ったり、百五十キロのボールを投げたりするのと同じように他を凌駕りょうがするような才能がいるんだ。

そして天才を発見するためには教育の充実が必要だ。豊かな才能とそれをはぐくむ環境があって、天才の能力は発揮されるからだ。だから、教育水準の低い、自国で子どものエージェントを発見することのできない国の政府は、他国の小中高校にエージェントを教師や児童、生徒、職員としてもぐりこませ、リクルート活動をする。実際は先進国でもかなりやってるんだけどね。まあ、いいや。

で、気に入った子どもがいたら、エージェントとして働いてもらえるよう、その子にオファーをかけるんだ。もちろんその子の親や親族には内緒でね。

そして、どうやらおれも留学中にある国のエージェントの目にとまったらしい。おれとしては、いたって普通に過ごしていたつもりだったんだけど。

ある夜から、背後に気配を感じるようになったんだ。米国むいこうは物騒

だからね。正直怖かった。最初の方はクラスメートと一緒に登下校していたけど、おれを狙ってるってことが分かってからは、一人で行き帰りするようになった。他の人を巻き込みたくなかったから。そしておそらく向こうもおれが気づいてるってことに気がついてたんだろう。それで、こいつは優秀なやつだと確信したらしい。まあ、組織は何も教えてくれなかったから、今となっては、はっきりとしたことが分からないけど。

後になって聞いたことだけど、他の国や組織もおれのことを狙ってたらしい。そこで、あせった組織は強硬手段やつら きょうこうしゅだんに出た。

そう。あの日だ。

おれと友達は何に行った。大体のところはあんたも知ってるだろうから、連れ去られたところから話そう。

ちょうど事件があったとき友達がトイレに行っていたんだけど、おれがぼうつと海を眺めていると、いきなり背後から三人の男に捕まえられた。抵抗する暇もなかったんだ。そして注射を打たれた。二人が押さえつけて一人が注射を打った。何を打たれたのかは分からない。意識はあったんだけど、体が全く動かなかった。

おれは小型ボートに積み荷のように乱雑に乗せられると、少し離れた岩場まで運ばれた。そこはビーチからは死角になっていて、うつそうとした茂みに囲まれていた。

岩場には大きな空洞があって、そこに大きな船が泊まっていた。そのとき空洞の奥の方で、ゲイのカップルがいちゃついていた。そこに三人の屈強な男たちと、あわれで華奢な少年が現れたもんだから、驚いて、いちゃついている手をとめた。

どこの警察が担当したのか知らないが、正直警察の怠慢だたいまんと思う。警察の発表をどこかで見たけど、目撃者は地元住民一人だけということになってる。でも、あのゲイのカップルにちゃんとした証言をとれば、解決まではたどりつかないまでも、捜査の道筋みちすじぐらいはたっていたはずなんだ。

ゲイの交際は、もちろんプラトニックな関係から始まることも多いけど（まったく性交渉を行わない人もいるくらいだ）、まず性交渉からスタートすることも多い。異性愛者と比較して、一部のゲイの人には体の相性が重要なんだ。それは異性愛者おれたちとゲイの人たちの恋愛スタイルの違いとして理解する必要がある。ゲイの恋愛スタイルは多様なんだ。

あの岩場はビーチで出会ったゲイのカップルの性交渉の場になっていた。ちょっと聞き込みを行えば、そのことはすぐに分かったはずだ。そしてそういう秘密の場所は、一般的に犯罪に利用されやすい。

おそらく警察はあのカップルに聞き込みなんてしてないだろう。もし聞いたとしても、こう聞いたんだろう。近くで日本人の少年が行方不明になっているのですが、何かご存じないですか？はい、見ました、なんて答えるわけがない。見たといったら、どんな状況だったか、誰が何をしたのか、そして自分たちがそのとき何をしていたのかを聞かれるだろう。答えられるわけがない。自分たちの行為を人に見られるという恥辱ちじよくを味わったんだから。そして、返答できなかったら真っ先に疑われるのは自分たちだ。なおさら答えるわけがないじゃないか？

まあ、いい。おれと三人の男たちは、船に乗り込んだ。もちろん

小型ボートは大きな方の船に乗せたんだ。警察はビーチに小型ボートが出ていった跡しか残ってなかったから、必死こいてボートの行方を探してたらしいけど、証拠はできるだけ残さないのが賢明な方法だ。明らかな捜査ミスだ。もちろん警察内部に組織の内幕者がいて、誤った方向性を示唆した可能性も否定できないけどね。

三日間の窮屈な航海（荷物室に入れられてたんだぜ！）を終えたのち、両腕に手錠をかけられたまま、組織に連れられたおれは、うちのエージェントにならないか、という誘いを受けた。ま、いわゆる不自由な二択だよな。しぶしぶOKと言ったら、「スマートだ。ボーイ」と言われた。ほめられてるのかバカにされてるのか分からなかった。

おれはエージェントとなるための訓練を一年ほど受けた。もともと日本専門の情報収集を行うエージェントとなるはずだったんだが、幸か不幸かこいつは有能だと判断されたく、暗殺を含めた物理的工作を行う部署に回された」

おれはイサオの話をさえぎった。

「お前、殺ったのか？」

「それは聞かない方が平和でしょう」イサオは苦笑していた。「続き、話していいかな？」

おれは顔をこわばらせながら頷いた。

「おれは五年とちよつとの間、まじめに仕事をやった。青くさい言い方になるけれども、黒い霧がうずまく闇の世界の仕事に、おれの青春を費やしたんだ。楽しくはなかったけれども充実感があった。他の平凡に大学生活を楽しんだり、無味乾燥な仕事をしてるやつら

には絶対にできない経験をしていたんだから。

でも、先日あっさりと解放された。莫大な退職金たいしよきんもつけてね。おそらく組織もおれに対して引け目を感じたんだと思う。前途ぜんとある少年を拉致らちったあげく、親にも言えないような血なまぐさい仕事をさせたんだから。そんなわけで、日本に帰ることになった。組織のこととはしゃべらないって条件付きでね。まあ、今まで話したことくらいはセーフなんだけど」

「でも、でもお前…」

おれの今までと違う様子にイサオは不思議そうな顔をした。

「お前死んでるんだぜ。三年前に。お前の家族が葬式やりやがったんだ。まだ生きてるかもしれないってのに」

「知ってたよ」イサオはため息をついた。「組織がおしえてくれたよ。お前は日本では死んでるんだってね。生身のおれは生きてるんだが。まあ、仕方がないよ。逆の立場だったら、おれだってそうしたかもしれない」

「でも、これは知ってるか？」

「何？」

「お前のおふくろさんだけは泣いてたんだ。わんわん、わんわん。周りはいらつとしてるのにさ。おふくろさん、最後までお前のことあきらめきれなかったんだよ」

一瞬の沈黙があった。

「なるほどね。組織はそこまで教えてくれないからな。そうか…」

イサオの声が詰まった。我慢しているようだったがそれにも限界はあった。そしていったん堰^{せき}がおちてしまうと、イサオはおれのことなんてお構いなしに、声をあげて泣いた。涙がほほを伝っては落ちた。まるで古びたぜんまい仕掛けのブリキの人形がいきなり動き出したようだった。

イサオの時間はやっぱり止まっていたんだと思う。それが日本に帰ってくることによって、おれに会うことによって、そして何よりも母親の愛情に間接的にであったとしても触れることによって、いまやっと動き始めたんだろう。それは、たとえイサオが俺の前で二十過ぎの男とは思えないくらいみつともない姿をさらしていたとしても、止められるものではなかったし、止める必要もなかった。

第五章 敗北、そして怒り（前書き）

この小説のタイトル、おそらくチャンドラーの「ゆすり屋は撃たない」に影響を受けています。

前置きが長くなりましたが、次話より本編に入ります。

話に入り込みやすくするためにこれより先は前書きを書きません。何かありましたらコメント欄のほうにお願いします。

ハードボイルド小説は男のハーレークイーン文庫といった作家がいきました。

確かにそうだと思う！書いてて楽しいもの！

では、本編をお楽しみください。

第五章 敗北、そして怒り

隣で泣かれるのが嫌だというわけではなかったが、やっぱりきまりは悪かった。だから、おれはセブンスターの箱を開けると、ライターで火を点け、宙を見ながら喫^すった。

おれはイサオにもタバコを勧めた。

「いや、いい。職業柄^{しよくぎようがら}、においがつくようなものはダメなんだ。現場に証拠が残るといけないから」

ち、徹底してやがる。

しょうがないから、おれは一人でたばこを喫った。吸殻が一つ増え、二つ増え、灰皿いっぱいになった。

そのころにはイサオもようやく落ち着いてきた。だからおれは、おれの一番聞きたかったことを聞いた。

「ちょっと聞きたかったんだが、どうして他のやつじゃなくおれに接触を求めてきた？それと新宿駅でおれに会ったのは偶然だったのか？」

イサオは一息つきながら答えた。

「まず一つ目の質問だけど、日本に戻るってなったときに、さすがに実家に行くのはNGだろうと思った。あまりにも面倒なことが多いすぎるからね。かといって、自分一人で住むにしても、表向きは死んだことになってるから、いろいろと手続きが面倒くさくなる。身

分を証明するものなんてもちろんないし。高校や中学の時の友達を頼ってもよかったけど、おれもすねに傷持つ身だから、過去のクラス名簿とか卒アルを調べられたら、おれどころかそいつにまで危険が及ぶことになる。これもダメだ。すると関係をつきとめられる可能性が低く、過去親しかった人物のもとに転がりこむのが一番じゃないかと思ったんだ」

「それがおれだったわけか。ちょっと待てよ。ということはお前、おれの家に住む気なのか？」

「嫌なの？だってあんたおれのこと好きでしょ？」

イサオは笑う。

おいおい、待ってくれよ。何が悲しくて男と一緒に住まなきゃならないんだ？確かに小さいころのあいつとは仲良かったし、まあ好きだった。だからって同居するほど好きだったわけじゃないし、もちろん好きって感情も恋愛感情ではない。なによりあいつが国家の機密を握っているのなら、最悪何かの間違いでおれが殺されることだってあり得るじゃないか。いや、あいつ自身に殺されることだって…。

「いや、それはちよつと…」

「へえ、嫌だっていうんだ」

イサオはコートの裏ポケットから、銀色に鈍く光る物体を取り出し、おれに突きつけた。

「もうあんたには拒否できないんだよ。こうなった以上ね」

「お、大声を出すぞ」

「出してみな。その前に撃つだけのことさ。おれはプロなんだよ」

イサオの透きとおった目がおれの目を射抜く。小さいころとは違っていた。鷹のような鋭い目つきだった。

「分かった。分かったから止めてくれ」

銃が下におろされる。

「二つ目の質問の答えだ。日本に来る前、あんたが木曜日の夜は必ず新宿近辺で飲むことはすでに調査済みだった。飲む時間は大体八時半から九時ごろ。たいてい一人で飲む。飲む店は日によってまちまちだが、アーケード街のどこかで飲むことが多い。さらにいうなら今週開店する店が三軒あって、あんたとおれが会った場所のすぐ近くだ。人の心理としては新しくできた店を見てみたくなるものだろうし、あのあたりで張っていたらいるだろうと思っていたら案の定だった」

負けた。完敗だ。

「分かった、好きにしてくれ」

「ありがとう」

イサオの顔がほころんだ。

「あ、そうそう。この銃だけどね」

イサオが大事そうに、短い銀色の銃身をなでる。

「同僚に餞別^{せんべつ}として送られたものなんだけど、アラスカンっていつてね、すさまじい威力のリボルバーなんだ。一発撃つだけで手が痺^{しび}れる。銃弾も類を見ないくらいゴツくてね。撃ってしまえばすぐにこいつの仕業だって分かるだろう。正直言って、誰かをこっそりと殺すための銃ではないねー」

おれは啞然^{あぜん}とした。それにかまわずあのクソ野郎は続ける。

「あ、金のことだけどね。基本的に家賃は折半にしよう。今は諭吉^{ゆきち}さん三枚くらいしか持っていないんだけど、ここの住所教えてるから明日くらいに金が届くと思う。自分で持ってきててもよかったけど、ちょっと心配だったからね」

おれの怒りが爆発した。焼酎を浴びるほど飲んで寝た。あいつとは違う部屋で寝た。入ってくるなと言った。相手は銃を持っている殺し屋だったが、そんなの関係なかった。とりあえずむしゃくしゃしてたんだ。

あいつはあの、アラスカンという銃が暗殺用の銃ではないと言った。つまり、あいつには最初からおれを殺そうとする意思なんてなかったんだ。しかもあいつがおれに会う前から、おれの住所を指定して金を届けさせたということは、おれがあいつの要求を呑んで、同居を許可するだろうと高^{たか}をくくってたんだらう。

何よりイラつくのは、実際におれがあいつの思い通りに行動してしまったことだ。おれは最初から最後まであいつの手のひらの上で踊ってたんだ。

次の日、おれの家のチャイムが鳴って、ドアの前にギターケースを持った男が立っていた。おれはそいつをにらみつけてギターケースをふんだくった。満面の笑みを浮かべたイサオの前でそれは開かれた。札束がどっさり入っていた。次の日も、また次の日もギターケースを持った男がやってきた。おれはものすごくムカついたから、へらへら笑っているイサオの顔に、札束を思い切り投げつけてやった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1680ba/>

殺し屋は人を殺さない

2012年1月10日09時45分発行